

社会とともに歩むOR学会

岡 久雄

1. まえがき

ORをはじめ経営工学関連の学会は、産業界なので起きるさまざまな現実問題に対し、実際に企業が必要とする意志決定や管理運営のため役に立つ手法を提供することが重要である。したがって、現場と研究者との対話や交流を深めながら、時々ニーズに応え生きた学問としての活動を展開する上で、会長職を含め学会役員が企業人、大学人とで交代し合うことは非常に意味がある。

そのようなわけで、前任会長の森村英典先生の強い要請により、筆者は1990年から2年間日本オペレーションズ・リサーチ学会の会長を引き受けたわけである。

筆者が若い時代、三菱電機においてまだ搖籃期にあった半導体の製造や開発に関わっていた1960年代には、確かに工場運営や開発管理にいろいろと新しい手法が導入され、ORの話を書く機会や実際にPERTを用いて確実な開発推進を手がけたこともあった。しかしその後直接ORとは理論的にも実践的にも関係することがなかったため、はたしてこのOR学会の会長職を勤めることができるかどうか、正直なところ大変不安であった。

かつて、三菱電機には加藤威夫氏、八巻直躬氏のようなわが国の経営工学の先達としても立派な経営者がおられ、学会活動にも大きく貢献された。多くの先人たちの努力により、経済大国、産業技術一流国と言われるようになったわが国では、現在OR等の経営工学に対する経営者の関心は、残念ながらむしろ薄らいでいるのではないかと思われる。ここにOR学会としての大きな課題があり、最近とくにORの実学への回帰ということが強く叫ばれる所以でもある。

学会長を引き受けた以上、産業界経営者の1人として微力ながらも学会の発展に役に立つことができたいという思いを強くし、2年間、学会役職員そして会員

の支援と協力を得て、なんとか会長を勤めることができたことは、筆者の人生にとって大変光栄であり有意義であったと考えている。

2. OR学会について思うこと

OR学会との関わりをもつことにより、研究発表会、シンポジウムなどにも出席し、話や挨拶をさせられることもたびたびであったが、難しい論議は別として、OR学会員や経営工学研連の方々と親しく対話する機会を得て、これまでどちらと言うと先端技術のハード的研究開発を中心に企業生活を過ごしてきた筆者にとって、新しい目が開けた思いを強くした。

学問としてのORでは理論的解析や種々の科学的手法を体系的に構築していくことが重要であるが、同時に社会や産業界のかかえる困難な課題を捉え、現実に密着した実践の場として最適解を求める研究も大切である。たとえ完全な解が得られずとも、物事をOR的に考える力を養うことも今日求められていると考える。

しかし、それにもかかわらずORに対する関心が高くなっていないのは、ORに対する世間の認識や評価に問題がある。

現在わが国産業界では長びく不況に喘ぎながら、さらには21世紀を目前にして起こりつつある内外のさまざまな変革に対応しつつ、リストラとかりエンジリアリングと称して、企業経営の刷新をはかっている。企業は経営刷新に本当に役に立つと考えれば、それを採用することに躊躇しない。すなわち今日世間ではORは実際に役に立つ、費用をかけてでも効果が大きいという認識や評価が少ないのではなからうか、むしろ未だにQCやIEといった言葉の方が多く語られている。

数年前より、OR企業サロンが定期的に催され、産業界からの評価も次第に高くなっている。このことはやはり、今日の大きな変革の時代に企業が経営刷新のため、とにかくいろいろ学びたいというニーズが強くなっている現われである。OR企業サロンでは今日経営者や管理者が関心を強くもち注目しているテーマを選

び、講師もそれに適した人を選んでいる。話の内容も必ずしもORの学問と直接関係のないように思えるものもあるが、もともとORでは、そのような社会の今日的課題を取り上げることが大切であろう。世間の目をORに向かわせ、できればOR学会への一層の参加を拡げるための優れた企画と評価したい。

最近のOR誌に、森村先生が2回にわたり『日本のORの進展とその環境』と題し執筆されている。かつてOR学会と接触のなかった筆者にも理解できる記述で、大変参考になった。その最後に「ORの働き場がたくさん与えられるならば、そのような環境からORの道具を使いこなす技術の開発も進むであろう。その結果ORは本来の力を発揮することが期待でき、合理的な社会の運用も増すであろう」と結んでいる。

いま、ORを必要とする働き場所は確かに増えている。その理由として挙げられるものは、第1に技術が高度化し、情報化が進むにつれて、社会の仕組みの中での相互依存性が強まっていること。そのため企業経営であれ、工場運営あるいは研究開発であれ、意思決定のためこれまで以上の多くの要素が複雑にからみ合い、目的に沿った最適解を見いだすことは一層難しくなっている。そこで、よく現在は先が見えにくいとか、不確実性の時代あるいは閉塞状態にあるなどという表現がよく使われる。このような状態こそORの働き場所が潜在していることを意味する。

一方、戦後生れで、きわめて強いインパクトを社会に及ぼしつつ急速に進歩発展してきたコンピュータサイエンスの世界では、ハード、ソフト両面の進歩がからみ合いつつ、今日では複雑な自然現象や社会現象の計算や解析あるいはシミュレーションやモデリングを可能としてきた。今後コンピュータはハード、ソフト双方とも一層進歩し、部分機能的には人間の能力を超えることがあっても、ハード、ソフトの総合的能力として人間の脳機能をこえることは決してないであろう。

したがって、コンピュータは人間に奉仕する道具として、たとえばORについて等、目的に応じた必要機能を最大に発揮できるよう使われるべきである。

前述のように、今日われわれが遭遇している未曾有の変革の時代にあって、解決すべき課題はきわめて複雑で、処理すべき情報量も膨大である。

今日、ORが挑戦すべき働き場所では、OR初期の頃と比べ、はるかに多くの要素を組み込んだ計算や解析が必要となっており、モデリングにしろシミュレーションにしろ膨大な情報処理を必要とするのではあるま

いか。

働き手が、働き場所において十分働き得る道具が提供されなければならない。これまでのORにいかにか新しいコンピュータサイエンスを結合させていくかは、今後のORの進展にきわめて重要なポイントであろう。

現在、筆者は新エネルギー、産業技術総合開発機構の理事長として、将来一層重要となるエネルギー、環境問題や新しい産業創出の芽を生み出す基礎的、先導的産業技術の研究開発を、産官学の協力体制によって推進する役目を仰せつかっている。

地球の人口問題、開発途上国の急速な経済成長、それに伴う生産、消費そして廃棄物の急増は、いやが上でも、今後のエネルギーの安定供給、地球環境の保全などに深刻な影響を与えようとしている。また東西冷戦終焉後の新たな東西、南北問題ともからみ、いま産業界は、これまでの拠り所であった市場経済、自由競争の枠組みを1歩乗り越え、新しいグローバル時代の芝生の道を探りつつある。

経済の持続的成長、それに要するエネルギーの確保、そしてかけがえのない地球の環境保全、この3つをバランスよく調和させることは、考えてみればきわめて難しく、これをジレンマをもじってトリレンマと称している。ここにも、最高の道具を駆使してチャレンジするORの働き場所があるような気がしてならない。

3. OR学会の今後への期待

筆者は、現在(財)電気学会の会長ほかいろいろな学協会の役職を引き受けているが、今日、どこの学協会においてもほぼ共通の課題をかかえている。とくに最近の社会情勢とも関連し、財政問題、会員増強とくに若手会員の活性化に対し、いろいろ対策が練られている。

OR学会は比較的小じんまりとした学会で、会員相互の意志疎通や融和も他と比べうまくいっているように思われる。学会は常に若さを保つことが肝要で、先輩と若手とのフランクな対話交流は重要である。

また、今後OR学会では、実学を尊ぶ世間との接触がますます大事にされなければならない。同時に若手会員を送り出す母体としての大学等へのOR学会としてのアピールも重要で、学生論文賞へ多数応募されるようなPRも必要である。

要するに、学会は、内部体制の強化とともに世間を開かれた学会となり、より多くの賛助者やシンパを増やす努力が肝要である。